

対馬神社ガイドブック

～ 神話の源流への旅～



天神多久頭魂神社（上県町佐護湊）

一般社団法人 対馬観光物産協会

はじめに ～対馬と神社について～

対馬（つしま）は、九州本土と朝鮮半島の間に浮かぶ面積約710平方km（属島含む）の大きな島ですが、面積の89%は山地であり、全島が岩がちで、農耕地は1%ほどしかありません。朝鮮半島までの距離は49.5kmしかなく、**国境の島**と称されています。

魏志倭人伝に「南北に市糶（してき。米を買う＝交易を行う）す」と描写された対馬の海洋民は、島の中央に広がる浅茅湾を利用しつつ、航海術を駆使し、大陸と日本列島の間を移動していました。

その活動が日本列島に金属器・文字・仏教などの大陸文化を伝えましたが、対馬海峡は危険に満ちており、対馬に**海神信仰**が定着したのもごく自然な成り行きだったのでしょうか。また、政祭一致の時代、中央の政治にも大きな影響を与えた古代の占いの技術・**亀卜（きぼく）**も早くから伝わっていました。

平安時代に編纂された『延喜式（えんぎしき）』に記載された神社（官社、いわゆる式内社）が九州全体で98社ありますが、うち**約3分の1にあたる29社が対馬に集中**し、九州最多となっています。（壱岐の24社を加えると、両島で九州の半数を超えます）

式内社の多さは、対馬がかつて中央の政治にも大きな影響を与える占いの知識・技術の中心地であり、大陸航路の拠点であると同時に国防の最前線として、当時の**朝廷から非常に重要視されていた**ためと考えられています。

時代が下って江戸時代の対馬藩三代藩主・**宗義真（そうよしざね）**の調査による島内の神社数は**455社**（祠がない聖地崇拜などは除く）で、平成29年3月現在、神社庁に登録されている島内の神社は**130社**（境内にある小さな神社をふくめると約200社）です。

神社合祀などでかなり減少したとはいえ、登録外の神社や小さな祠などを含めると今でも相当な数・密度になり、古代から現代に至るまで、対馬はまさに**神々の島**だったのです。

ただ、島内のいたるところで神社・鳥居が目につくにもかかわらず、由緒書きなどの説明板がほとんどなく、訪問者が情報を得るのが困難であるため、神社パンフレットの作成を企画しました。構成としては、「**古事記・日本書紀（記紀神話）のあらすじ**」「**対馬の伝承**」「**神社と鎮座地の紹介**」「**コラム**」となっています。

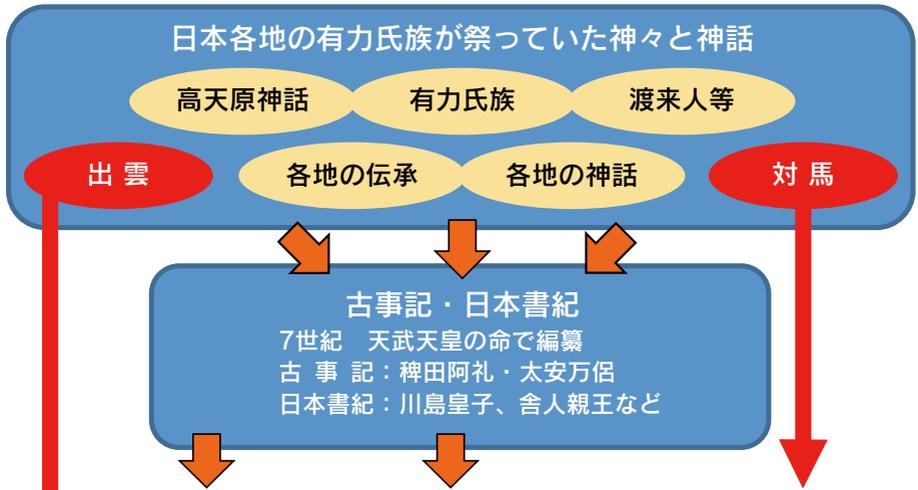
本ガイドブックの作成にあたり、文献やインターネットの情報をもとに、島内の神社の調査を行いました。無人島に祭られている神社などもあり、すべてを確認することはできませんでした。それらを訪問するのは今後の楽しみにとっておきたいと思います。

皆様が対馬の神社・神話世界をめぐることを願っています。その際、この拙いガイドブックが助けになれば、望外の喜びです。

2017年3月

一般社団法人 対馬観光物産協会
局長N

日本神話と対馬の神々



日本神話のあらすじ	登場する神々	関連性	対馬の神話・伝承
天地の始まりと特別な神々	タカミスビ・カミスビ イザナギ、イザナミ	←あり→	タカミスビ・カミスビ —
国生み・神生み アマテラスとスサノオ	大八島国 アマテラス スサノオ オオクニヌシ スクナヒコナ	←あり→ ←あり?→ ←あり→	アメノサデヨリヒメ アマテル スサノオ — —
出雲の国譲り	大歳神、ウカノミタマ タケミカズチ コトシロヌシほか	←希薄→	大歳神、ウカノミタマ — —
天孫降臨・ニニギの物語	ニニギ オオヤマツミ	←希薄→	— オオヤマツミ
海幸彦・山幸彦	ヒコホホデミ (山幸彦) トヨタマヒメ ウガヤフキアエズ	←深く関連→ ←深く関連→ ←深く関連→	ヒコホホデミ (山幸彦) トヨタマヒメ ウガヤフキアエズ
神功皇后	ツツノオ三神 神功皇后 イカツオミ イソラ (中世神話)	←希薄→ ←深く関連→ ←深く関連→ ←深く関連→	ツツノオ三神 神功皇后 イカツオミ イソラ
	— — —	対馬固有 対馬固有 対馬固有	モロクロガミ オヒテリ タクズダマ

出雲神話

神社庁に登録されている対馬の神社130社（平成29年3月）

厳原町（35社）

「長崎県対馬市厳原町」を省略

番号	神社名	祭神	旧社格	例祭日	鎮座地
1	八幡宮神社	應神天皇外4柱	県社	旧8月15日	中村645番地 - 1
2	池神社	建彌己己命	村社	旧3月11日	今屋敷769番地
3	濱殿神社	豊玉彦命	村社	旧8月15日	今屋敷712番地
4	大歳神社	大歳神外2柱	村社	旧9月28日	中村565番地
5	住吉神社	表筒男神外2柱	村社	旧3月29日	厳原東里353番地
6	興良祖神社	豊玉姫命	村社	旧3月16日	厳原西里372番地
7	志々岐神社	豊玉姫命外2柱	村社	旧6月初午日	久田788番地
8	志々岐神社	豊玉姫命外2柱	無格社	旧4月12日	小浦308番地
9	山住神社	大山祇神		旧11月1日	曲16番地
10	乙宮神社	玉依姫命	無格社	旧3月4日	南室209番地
11	南室島神社	天日神命	無格社	旧11月初甲日	南室233番地/1
12	小茂田濱神社	贈従三位宗右馬允助國	県社	11月12日	小茂田742番地
13	山形神社	素盞鳴命	無格社	旧11月15日	小茂田175番地
14	銀山神社	諸黒神	村社	旧3月10日	大字櫻根281番地1
15	佐須乃若御子神社	若御子神	村社	旧3月15日	下原401番地
16	天神神社	彦火々出見命	村社	旧6月1日	椎根136番地
17	豊和多都美神社	玉依姫命・豊姫命	村社	旧6月15日	椎根1243番地
18	雷命神社	雷神雷大臣命	村社	11月8日	大字阿連215番地
19	木武古婆神社	宗弥次郎左衛門尉重尚	村社	旧4月1日	大字内山551番地
20	妙躰神社	素盞鳴尊ノ姫ノ神	村社	旧10月28日	豆酩瀬219番地
21	多久頭魂神社	天照大御神外4柱	郷社	10月18日	豆酩1250番地
22	高御魂神社	高皇産靈尊	村社	10月18日	豆酩2424番地口
23	神住居神社	神功皇后	村社	10月18日	豆酩2425番地
24	師殿神社	宗兵部少輔盛世之靈	村社	10月18日	豆酩2424番地口
25	天神神社	廳神	村社	10月18日	豆酩2653番地
26	國本神社	天津神	村社	10月18日	豆酩656番地
27	雷神社	雷大臣命	村社	10月18日	豆酩2852番地
28	奈伊良神社	彦火々出見尊外2柱	村社	旧8月15日	豆酩内院70番地
29	志々岐神社	豊玉姫命を主神として天忍人命・十城別王命	無格社	旧6月5日	尾浦31番地
30	木根神社	大己貴命		旧6月10日	安神545番地
31	乙和多都美神社	玉依姫命・豊姫命	村社	旧10月15日	久和1番地
32	銀山上神社	諸黒神・安德帝	村社	旧4月15日	久根田舎507番地
33	天神神社	彦火々出見尊・菅彥相2柱	村社	旧3月25日	久根浜315番地
34	乙宮神社	玉依姫命	無格社	旧9月28日	上槻859番地
35	奈伊島神社	瀛津島姫命外2柱	村社	旧3月15日	興良内院2番（島）

【番号】 神社庁に登録されている神社を近隣エリアごとに並べかえ、通し番号をつけたものです。本ガイドブックで、□□神社（番号〇〇）と表記しています。

【神社名／祭神】

神社庁に登録されている神社名・祭神ですが、時代によって名称・祭神が異なる場合があります。※名神大社6社の比定（推定）社は着色しています。

【社格】 明治時代から第2次大戦後に廃止されるまで、延喜式にならって定められた神社の格式で、官・国弊社のほか、県（府）社＞郷社＞村社＞無格社がありました。

【例祭日】 神事が行われる日ですが、他に年数回開催される場合もあります。

【鎮座地】 現在の社殿の住所ですが、本来の信仰対象（神体山等）は他の場所にある場合があります。

美津島町 (25社)

「長崎県対馬市美津島町」を省略

番号	神社名	祭 神	旧社格	例祭日	鎮座地
36	住吉神社	彦波瀲武鸕茅草葺不合尊	郷社	旧9月13日	鶏知甲1281番地
37	和多都美神社	多紀理媛命外2柱	無格社	11月15日	根緒432番地
38	能理刀神社	宇麻志麻治命外2柱	無格社	旧5月28日	大字船越字古里176番地2
39	乙宮神社	玉依媛命を主神として豊玉媛命	無格社	旧11月17日	緒方213番地
40	乙宮神社	玉依媛命	村社	7月10日	久須保362番地
41	海祇神社	海祇神	無格社	旧11月1日	島山1番地
42	恵比須神社	蛭子尊	無格社	旧6月21日	犬吠310番地
43	若宮神社	若宮神	無格社	旧11月15日	大山250番地
44	阿麻氏留神社	天日神命	村社	旧11月9日	小船越352番地
45	住吉神社	彦波瀲武鸕茅草葺不合命・三筒男命	村社	旧9月13日	鴨居瀬491番地
46	乙宮神社	玉依媛命	無格社	旧6月12日	芦浦293番地
47	恵比須神社	彦火火出見尊外4柱	無格社	旧3月10日	賀谷字在所124番5
48	天神神社	彦火々出見尊	無格社	旧6月7日	濃部146番地
49	八幡神社	息長足媛尊	無格社	6月1日	竹敷385番地
50	八幡神社	息長足媛尊		6月29日	昼ヶ浦98番地
51	白嶽神社	大山祇神外1柱	無格社	6月10日	洲藻347番地2
52	大吉戸神社	應神天皇・神功皇后・豊姫命	村社	9月15日	黒瀬515番地
53	塩竈神社	塩土翁	無格社	6月1日	箕形184番地
54	天神神社	天津神外2柱	無格社	6月2日	吹崎8番地
55	敷島神社	天佐手依比女神	村社	6月15日	加志386番地
56	太祝詞神社	太詔戸神	県社	旧9月9日	加志512番地
57	山本神社	太田命	村社	旧11月7日	今里81番地
58	都々智神社	天狭手依比賣命外3柱の大神	村社	旧6月2日	尾崎737番地
59	志賀神社	磯良海祇	村社	旧6月12日	今里293番地 (島)
60	胡祿島神社	火雷命・猿田彦命・塩土老翁	村社	旧6月13日	鴨居瀬字黒島443番地 (島)

豊玉町 (21社)

「長崎県対馬市豊玉町」を省略

番号	神社名	祭 神	旧社格	例祭日	鎮座地
61	能理刀神社	天兒屋根命・雷大臣命	無格社	旧6月2日	横浦239番地
62	志古島神社	磯良海祇神	無格社	旧8月12日	和板原106番地
63	和多都美神社	彦火々出見尊・豊玉媛命	村社	6月1日	仁位字和宮55番地
64	和多都美御子神社	彦波瀲武鸕茅草葺不合尊・菅原道真公・神武天皇・應神天皇	村社	8月25日	仁位字桜町1416番地
65	阿恵神社	雷大臣命	無格社	旧6月1日	仁位1283番地
66	糠嶽神社	糠嶽合戦戦死士卒之霊	無格社	6月1日	卯麦449番地
67	天神神社	天神多久頭魂神		旧6月1日	佐保1番地
68	行相神社	皇孫命・大己貴命	村社	9月9日	田1058番地
69	乙宮神社	玉依媛命	無格社	12月20日	糸瀬ミツカ12番地1
70	恵比須神社	匹昔日不合尊	無格社	旧11月10日	佐志賀9番地
71	嵯峨神社	素盞男命	無格社	旧11月2日	嵯峨330番地1
72	入江神社	廣島縣賀茂郡廣村村社 入江新宮神社乃霊			嵯峨624番地4
73	天神神社	天孫命		旧11月3日	貝鮒267番地
74	杵築神社	大己貴命	無格社	9月9日	貝口111番地
75	元嶋神社	素盛島尊		9月2日	唐洲647番地
76	霹靂神社	雷大臣神	無格社	6月1日	廻142番地
77	屋利止加神社	宇礼姫尊・呉姫尊	村社	旧6月2日	鐘川290番地
78	六御前神社	彦火火出見尊	無格社	9月23日	千尋藻338番地
79	伊和津岨幾神社	大己貴命・建布都魂神	村社	旧9月11日	千尋藻427番地
80	島御子神社	大國主神外1柱		11月1日	曾114番地
81	金刀比羅神社	事代主尊	無格社	10月10日	大字曾字位ノ端1050番地

峰町 (9社)

〔長崎県対馬市峰町〕を省略

番号	神社名	祭 神	旧社格	例祭日	鎮座地
82	恵比須神社	蛭子尊	無格社	旧11月1日	賀佐13番地
83	白嶽神社	神功皇后を主神とし外1柱の神		旧6月15日	吉田1129番地
84	天謠羽神社	天児屋根命外1柱主神	村社	7月15日	吉田941番地
85	小牧宿禰神社	建比良鳥命を主神とし4柱の神	村社	旧4月11日	三根959番地
86	海神社	豊玉姫命外4柱	国幣中社	旧8月5日	木坂247番地
87	住吉神社	上筒男神外3柱	無格社	11月1日	櫛194番地
88	和多都美神社	神功皇后を主神として	村社	6月1日	佐賀424番地
89	那須加美乃金子神社	須佐之男命	村社		志多賀290番地2
90	本山神社	須佐之男命	無格社	1月24日	志多賀2番地1

上臈町 (16社)

〔長崎県対馬市上臈町〕を省略

番号	神社名	祭 神	旧社格	例祭日	鎮座地
91	國本神社	天之佐手依姫命	村社	旧9月1日	瀬田1番地
92	若宮神社	雷大臣命外1柱	無格社	旧1月15日	佐護南里527番地
93	天謠羽神社	宇麻志麻治命外2柱	村社	旧1月3日	佐護北里793番地
94	天神多久頭魂神社	天神地祇	郷社	旧1月23日	佐護字洲崎西里2864番地
95	神御魂神社	神皇座靈尊	村社	旧3月3日	佐護北里字坂尻45番地
96	天謠羽神社	天兒屋根命外1柱	村社	旧11月27日	佐護東里字春日原120番地
97	島大國魂御子神社	大己貴尊	村社	6月1日	佐須奈字日吉乙170番地
98	媛大神神社	豊玉姫命		3月10日	西津屋663番地
99	鹿見本神社	宇麻志麻治命外2柱	村社	旧6月1日	鹿見126番地
100	八幡神社	應神天皇	無格社	旧8月1日	久原48番地
101	地主神社	素戔嗚命・五十武命	無格社	旧8月5日	女連85番地
102	森之神社	飯田式部外1柱	無格社	11月1日	御園272番地
103	彦山神社	伊弉諾尊外2柱	村社	旧1月7日	越高159番地
104	伊奈久比神社	大歳神	村社	旧7月25日	伊奈330番地
105	志多留能理刀神社	雷大臣尊外1柱	村社	旧1月24日	伊奈381番地
106	五王神社	素戔男之命外1柱	無格社	旧1月5日	志多留367番地

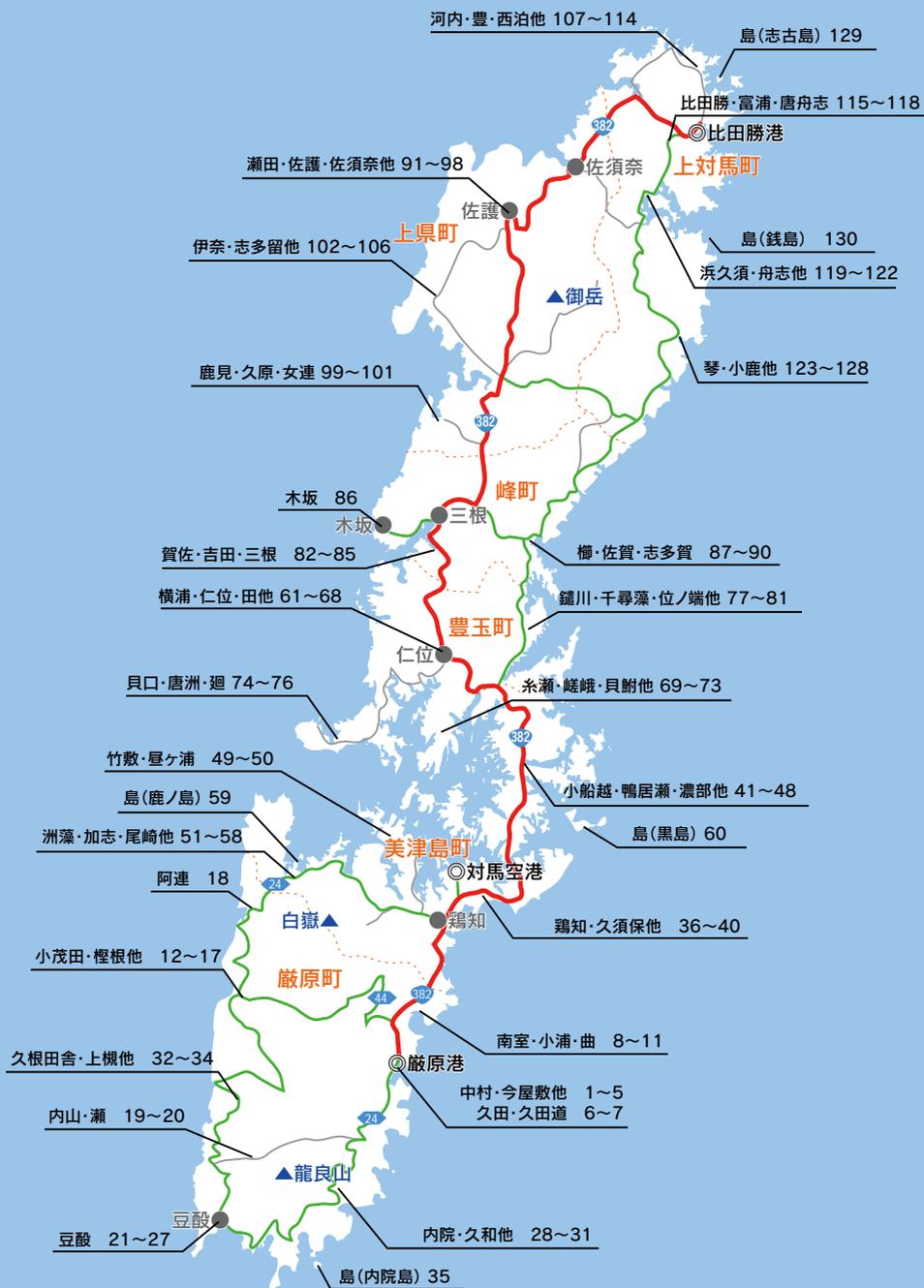
上対馬町 (24社)

〔長崎県対馬市上対馬町〕を省略

番号	神社名	祭 神	旧社格	例祭日	鎮座地
107	岩嶮神社	素戔嗚尊外2柱	無格社	旧10月1日	河内字藤内ケ内43番イ
108	大地主神社	大國主神	村社	4月3日	大浦439番地
109	本宮神社	神功皇后	村社	10月1日	鰐浦字在所陰531番地
110	島大國魂神社	素佐之男尊	郷社	旧11月5日	豊字ヱ1409番地
111	那祖師神社	祖師茂利の神	村社	旧11月5日	豊字大多1337番地
112	若宮神社	五十猛命	村社	旧11月5日	豊275番地
113	舌崎神社	宗盛國・盛世	村社	旧11月4日	泉字在所1417番地
114	能理刀神社	雷大臣命・天兒屋根命・宇麻志麻治命	村社	11月3日	西泊字横道218番地
115	豊崎神社	建御雷之神・豊玉姫・宗盛維	村社	10月3日	比田勝字山/山657・658番地合併
116	津和原神社	大己貴命・少彦名命・素戔嗚尊	無格社	旧11月1日	津和津和原736番地
117	天神多久頭魂神社	天神多久頭魂神	無格社	旧10月25日	富浦字在所104番地
118	曾根崎神社	素戔嗚尊外1柱	無格社	旧6月1日	唐舟志字在所381番地
119	霹靂神社	雷大臣命外2柱	村社	旧11月1日	浜久須字大石隈1074番地1
120	内園神社	宇麻志麻治命外1柱		旧11月3日	玖須字在所陽553番地
121	宗像神社	瀛津島媛神外2柱		旧11月2日	大増字東在所730番地イ
122	舟志乃久頭神社	神皇座靈神・多久頭魂神	村社	旧3月4日	舟志字田代甲681番地
123	曾根崎神社	五十猛命		旧11月10日	五根緒字平山188番地
124	胡祿神社	表津少童命外3柱	村社	旧3月3日	琴1番地
125	胡祿御子神社	表筒男命外3柱	村社	旧10月30日	琴字郷ノ浦3番地
126	能理刀神社	天兒屋根命外3柱	村社	旧1月11日	芦見字双ノ274番地
127	天謠羽神社	天太玉命外2柱	村社	旧2月10日	一重字尾崎段30番地11
128	那須加美乃金子神社	大屋彦神・大己貴命	村社	旧6月15日	小庭字大浜520番地
129	志古島神社	火雷命・猿田彦大神	村社	旧11月3日	泉1631番地 (島)
130	高崎神社	宗能登守盛弘	村社	旧1月11日	五根緒字ウツ496番地 (島)

対馬の神社庁登録神社130社・鎮座地

※左の文字は地名、右の数字は一覧表の神社番号



原初の神・タカミムスビとカミムスビ

【日本神話】 国生み

古事記はその冒頭において、原初の17柱の神々の誕生を描きます。最初に、**アメノミナカタシ**、**タカミムスビ**、**カミムスビ**という特別な神が現れました。なかでもタカミムスビは、天皇家の祖先神である**アマテラス**に天孫降臨を指示したり、初代天皇である**神武天皇**の東征を助けたりするなど、天皇家・朝廷にとって非常に重要な神です。

やがて、17柱の神々の最後に誕生した**イザナギ**（男神）と**イザナミ**（女神）により日本の国土と他の神々が誕生することになりますが、両神が生んだ淡路島、四国、隠岐島、九州、壱岐、対馬、佐渡島、本州は、「**大八島（おおやしま）**」と呼ばれ、当時の国土意識を示しています。（北海道・沖縄は含まれず、「本州」も実質的には西日本を指しています）

その後もイザナミは多くの神々を産みますが、火の神**ヒノカグツチ**を産む際に大火傷を負い、死者として**黄泉（よみ）の国**に降ります。妻を追って黄泉の国に向かったイザナギですが、妻との約束を破ってしまい、永遠の別離が訪れます。イザナギが黄泉の穢れを祓うために**禊（みそぎ）**を行うと、**アマテラス**、**ツクヨミ**、**スサノオ**などの主要な神々が誕生しました。

【対馬の伝承・異伝】

原初の神々のうちもっとも重要な**タカミムスビ**が、対馬南部の厳原町豆酸（いづはらまちつつ）の海岸沿いに鎮座し、対馬から磐余（いわれ、奈良県桜井市・橿原市）に遷座しています。磐余は、初代天皇である神武天皇の名「**カムヤマトイワレビコ**」（大和の磐余の尊い日子）に表れているように、大和朝廷の起源とされる土地であり、対馬が古神道の源流のひとつとされる所以（ゆえん）です。

また、同様に上県町佐護（かみあがたまちさご）には**カミムスビ**が鎮座しており、対馬固有の神である**タクズダマ**は、両神の子神とされています。

豆酸、**佐護**はそれぞれ、河口の平野部に位置する集落であり、遺跡・由緒ある神社が多く、古代の占いの技術・**亀卜（きばく）**を伝承していた、など共通点が多い集落です。豆酸は対九州の、佐護は対朝鮮半島の港として、古くから開けていたことも関係しているようです。

また、国土創造における対馬の別名は**アメノサデヨリヒメ（天之狭手依比売）**という女性名で、魏志倭人伝に描かれた荒々しい男性的なイメージとは対照的です。島の中央に、船乗りに安心を与える穏やかな内海・**浅茅湾（あそうわん）**が広がっており、海の女神のイメージが重ねられているのかもしれません。

アメノサデヨリヒメは数社で主祭神として祭られています。対馬そのもの＝「国魂」が出雲（いずも）地方の大国主（オオクニヌシ）を連想させるためか、祭神が出雲系の神々にすり替わっている場合もあるようです。

たかみむすびじんじゃ 高御魂神社

神社番号 22 式内社（名神大社）

周辺の神社 多久頭魂神社（21）ほか

アクセス 厳原町豆殿（つつ）の東の森に多久頭魂神社があり、その敷地内に多くの神社とともに鎮座。



周辺の雰囲気・環境など

対馬の南西部に位置する豆殿は、亀卜など独特の民俗が伝わる集落です。南は対馬海峡に面し、北東には龍良山（たてらやま）原始林が広がっています。

神社の近くには古代米・赤米の神田があり、敷地内には多くの神社が鎮座し、豆殿だけで1つの神話世界を形成しています。社殿の奥には、対馬最大といわれるクスノキの巨木がそびえています。

神社のプロフィール

元々は現在の豆殿中学校に位置していましたが、学校建設にともない、現在地（多久頭魂神社境内）に遷座しました。

式内社のなかでも特に靈験あらたかとされる名神大社（対馬には6社）のひとつです。日本書紀によると、5世紀、遣任那使の神託により、タカミスビが磐余（奈良県）に進出しています。



周辺の雰囲気・環境など

対馬の北西部に位置する佐護は、対馬では珍しい農耕地帯であり、良港となる入り江に恵まれ、古代から集落が形成されていたと考えられています。

ツシマヤマネコの生息や野鳥の飛来など自然が豊かで、棹崎公園には環境省の対馬野生生物保護センターがあり、春・秋の野鳥の渡りの時期には、パードウォッチャーで賑わいます。

かみむすびじんじゃ 神御魂神社

神社番号 95

周辺の神社 天神多久頭魂神社（94）

アクセス 上県町佐護湊から佐護川対岸へ橋を渡り、左手の小さな森の中に鎮座。

神社のプロフィール

佐護川の河口部の森のなかに鎮座しています。古事記には、カミムスビの性別をイメージさせる描写はありませんが、対馬のカミムスビは女房神と俗称され、御神体は日輪を抱いた女性の木像で、女神と考えられていたようです。

北（佐護）に女神カミムスビ、南（豆殿）に男神タカミムスビがいて、その子神タクズダマが両地域で祭られ、対馬固有の天道信仰（P29）の2つの中心地を形成していました。

太陽神・アマテラス

【日本神話】 三貴子の誕生

イザナギが黄泉の国の穢れを祓うために禊（みそぎ）を行った際、左目を洗うと太陽神アマテラス、右目からは月神ツクヨミ、鼻をすすぐと暴風神スサノオが生まれました。スサノオの粗暴な振る舞いに嫌気がさしたアマテラスが天岩戸（あまのいわと）に隠れると、世界は闇に包まれてしまい、神々は知恵を絞って天岩戸を開き、世界に光を取り戻します。

スサノオは追放され、アマテラスは孫にあたるニニギを支配者として地上に送り、その血脈が天皇家につながっていきます。いわゆる天孫降臨（P13）です。アマテラスは神宮（伊勢神宮）に祭られています。

【対馬の伝承】

対馬では、美津島町小船越にアマテル（阿麻氏留）という太陽神が、厳原町阿連の山中にはオヒデリ（御日照）という太陽の女神が鎮座しています。また、対馬固有の天道信仰の中心人物である天道法師は、その母が太陽光に感精して産まれたとされ、太陽の化身と考えられていました。

コラム 対馬の神社はどんな場所にある？

本ガイドブックの作成にあたって多くの神社を訪問しましたが、対馬の神社は山頂近くや海岸部に位置していることが多いようです。

かつては各地の神山で神事が行われていたようですが、その険しさゆえか、時代が下がるにつれ、山腹やふもとの集落に神社が建てられるようになります。標高はあまり関係なく、低山の山頂にも石の祠などがよく祭られています。

無人島・岬や、船でしか往来できないような海岸部にも神社は多く、また、現在は市街地であっても、かつては海岸線が迫っていたと考えられる八幡宮神社（番号1）のような場所もあります。

これらの場所は、航海の拠点として古くから海神が祭られていたようですが、対馬は元寇など外国の脅威にさらされることも多く、祭神が神功皇后などの武神に代わったケースも見られます。「天」と「海」はともに「あま」とも読み、神々は天から山頂に降臨し、海から岬や無人島に寄りつくと考えられていたようです。

神社の鎮座地や祭神の移り変わりを見ていくと、国境の島・対馬の歴史と、そこに暮らす人々の関心のありかが見えてきます。地図を見ながら、あるいは現地の神社で、そこにどんな人々が暮らしていたのか、想像してみるのも対馬の神社めぐりの楽しみのひとつです。

※神社の名称については、現地の通名と神社庁の登録神社名が異なっている場合があります。現地の方に場所を訪ねる際は、「峰町木坂の海神神社」など、地名もあわせてお伝えください。

あまてるじんじゃ

阿麻氏留神社

神社番号 44 式内社

百手祭り：旧2月9日

周辺の神社 住吉神社 (45)

アクセス 美津島町小船越の国道382号線沿いに鎮座。近くに古代の港である西漕手（にしこのいで）があります。



神社のプロフィール

古代航路の拠点に鎮座する古社です。祭神のアメノヒノミタマ（天日神）は日神（太陽神）で、巖原町豆殿に鎮座する至高神タカミムスビの5世の孫とされています。

日本書紀によると、5世紀、遣任那使・阿閉臣事代（あべのおみことしろ）が神託を受け、対馬のアマテル・タカミムスビを磐余（奈良県）に、壱岐のツキヨミ（月神）を京都に遷座させています。対馬・壱岐の祭祀集団を中央に移動させる政治的意図があったのかもしれません。

中国には、太陽はもともと10個あり、早魃が起きるため英雄が9つを射落としたという神話がありますが、阿麻氏留神社にも弓で的を射る神事が伝えられており、その関連が指摘されています。



周辺の雰囲気・環境など

美津島町小船越は、対馬海峡と浅茅湾をつなぐ海上交通の拠点で、かつて船を陸上げして狭い陸峡部を越えていたことが「小船越」の地名の由来です。

仏教など重要な大陸文化がここを経由して日本に伝わり、浅茅湾側の西漕手は古代の港の雰囲気を残し、また日本最初の寺といわれる梅林寺（最初の仏教伝来地）などの史跡も豊富です。



暴風神・スサノオ

【日本神話】 スサノオ

イザナギの禊により誕生したスサノオは、粗暴で無思慮な振る舞いにより天界を追放されますが、地上に降りてからは性格が変わり、怪物ヤマタノオロチを退治するなど、英雄として活躍します。樹木の用途を定めて植樹を行い、日本初の和歌を作るなどの文化的側面もあり、その性質は非常に複雑です。

地上に降りてから英雄になったというよりも、もともと英雄神であったものが、出雲地方（島根県）が大和朝廷の勢力下におかれていく過程で、粗暴さなどの負の側面が付け加えられたのかもしれませんが。

ちなみに、日本書紀の異伝（一書）には、天界を追放されたスサノオはまず朝鮮半島にあった新羅のソシモリに降りるが、その地が気に入らず日本に渡った、と記されています。

【対馬の伝承・異伝】

おもに対馬の北部から北東部にかけてスサノオおよび子神のイソタケル渡来の伝承地がいくつもあります。いずれも強烈なタブーの地とされ、植樹に関する伝承が残されています。

本来は出雲の神であるスサノオが、どのような経緯で対馬に祭られるようになったのかは不明ですが、ヤマタノオロチを退治してその尻尾からクサナギの剣を得る、という神話は、暴れ川の治水および川から得られる砂鉄と、熱源となる樹木を利用した製鉄の比喻とされています。

想像をたくましくすれば、朝鮮半島の森を刈りつくした製鉄者集団の首長スサノオが、対馬を経由して出雲に渡っていった、という物語も見えてきます。

コラム 信長・秀吉と津島信仰

津島神社（愛知県津島市）は、東海地方を中心に約3000社ある津島神社・天王社信仰の総本社です。織田信長・豊臣秀吉などからも崇敬された神社ですが、神社の由緒によると、欽明天皇元年（540年）、西国対馬より大神が来臨したのがその始まりとされています。

祭神であるスサノオの和魂は、新羅から対馬へ、さらに津島へと移ったものだったのです。移祭は、それに仕える祭祀集団の移動をともしないため、対馬から津島へ、人の流れがあったのかもしれませんが。

ちなみに、スサノオは疫病神である牛頭天王と習合し、津島神社のほか、祇園祭で有名な京都・八坂神社などの祭神となり、信仰を集めます。疫病を蔓延させる神を癒し、和ませることで疫病の拡大を防ぐ、という逆転の発想が信仰の基本であり、スサノオの複雑な性格は、中世になっても変わっていません。

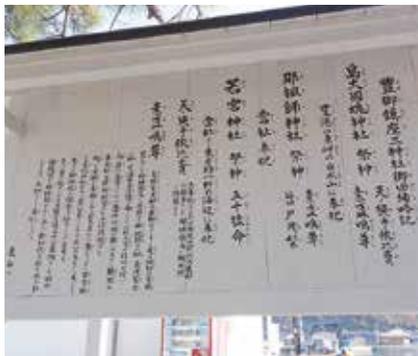
しまおおくにたまじんじゃ / なそしじんじゃ / わかみやじんじゃ

島大國魂神社・那祖師神社・若宮神社(三社合祀)

神社番号 110・111・112

式内社 (那祖師神社、島大國魂神社)

アクセス 対馬北端、上対馬町豊の上対馬漁協豊支所の道路向かいに鎮座。鳥居と、神社の由緒が記された説明板が目印です。



神社のプロフィール

上対馬豊(豊漁港)の北東、椎根島の白水山(しろみずやま)に島大國魂神社、東に1キロの海辺に若宮神社が鎮座していましたが、現在は集落内の那祖師神社に3社が合祀されています。

白水山は禁足地としてのタブーが激しく、立ち入ると大風が吹く、腹痛に見舞われる、災害が起きる、さらには、白水山には老人が住んでおり、そこで見聞きしたことを他言すると死んでしまう、という怖い伝承もあります。

白水山に続く海岸沿いの道は、不通浜(とおらずかはま)と呼ばれています。

南部の龍良山などと同様に、神聖ゆえに近づくことすら許されず、遥拝所(遠くから拜むための建物など)を造り、それが神社になっていく、という古い信仰のあり方をよく示しています。

周辺の雰囲気・環境など

上対馬町豊は、鰐浦とならぶ対馬最北端の集落です。今は静かな漁村ですが、かつては大陸航路の拠点で、豊崎郷の中心地でした。北西には対馬海峡西水道(朝鮮海峡)が広がり、朝鮮半島までの近さを実感します。



写真：豊漁港から白水山を望む

山の神・オオヤマツミ

【日本神話】 天孫降臨

至高神タカミムスビの命をうけたアマテラスは、孫であるニニギを地上に送ります。ニニギは、山の神オオヤマツミから娘のイワナガヒメ（姉）とコノハナサクヤヒメ（妹）を与えられますが、美しい妹のみを娶り、みにくい姉を送り返してしまいます。イワ（岩）の永遠性を捨て、やがて散るハナ（花）を選んだ瞬間から、人には寿命が与えられることになりました。

やがてコノハナサクヤヒメは懐妊しますが、ニニギは早すぎる妊娠を他の神の子ではないかと疑います。ニニギの子であることを証明するため、コノハナサクヤヒメはみずから産屋に火をつけ、燃えさかる炎のなかで、ホデリ（海幸彦）、ホスセリ、ホオリ（山幸彦＝ヒコホホデミ）を無事出産しました。山幸彦は、海の女神豊玉姫と結ばれて子神ウガヤフキアエスが誕生します。

【対馬の伝承・異伝】

対馬は島の面積の89%を森林に覆われた山岳島ですが、オオヤマツミを祭る神社は意外と少なく、対馬の山岳信仰の総社とされた白嶽、厳原町曲の山住神社などです。どちらも、スサノオ・イソタケルといった伐採のタブーや植樹に関する神をあわせて祭っています。

コラム 山岳信仰と磐座（いわくら）

対馬の古い神社の多くは、神籬磐境（ひもろぎいわさか）式と呼ばれる、神山などを聖地とし、社殿を設けない形式です。信仰対象は神聖不可侵のため、近づくことも禁忌（タブー）であり、遠くから拜むために神社を建てる、というのが対馬の神社の基本形ですが、これは、日本最古の神社のひとつとされる奈良の大神（おみわ）神社などと共通する古神道の原型でもあります。

そのほか、古い信仰の形態として知られているものとしては、「磐座」があります。神が降臨する巨石ですが、霊峰・白嶽は、白い岩盤が露出する山頂部そのものが巨大な磐座とも考えられます。神社（建物）だけを参拝するのではなく、その先にある本来の信仰対象や自然環境・歴史に想いを馳せると、対馬の神社めぐりがより楽しく、充実したものになります。

〈 神山の例 〉

御岳、白嶽、龍良山など

〈 磐座の例 〉

豊玉姫の墳墓（和多都美神社（63）の裏参道）、與良祖神社（6）の奥の院など



しらたけじんじゃ

白嶽神社

神社番号 51

アクセス 美津島町洲藻の集落入口から正面に見える白嶽を目指して進む。社殿横のイチヨウの大木が目印。数十m先の登山者用駐車場に駐車可。

神社のプロフィール

白嶽山頂は石英斑岩の双耳峰であり、朝日を浴びて白く輝くその山容は美しく、対馬の山岳信仰の総社とされています。全体が神山として崇敬の対象ですが、雌嶽の岩峰の根もとにある岩窟は特に神聖視されています。

雄嶽山頂からは眼下に濃緑の原始林や浅茅湾、対馬海峡が広がり、天の高さを実感できます。

白嶽山頂（雄嶽）付近は急傾斜で、岩盤が露出しており、登山の経験・装備が必要ですが、洲藻集落内の白嶽神社から遥拝することができます。境内にイチヨウの大木があり、秋が深まるころの黄葉は見事です。

周辺の雰囲気・環境など

美津島町洲藻は、対馬を代表する名山「白嶽」のふもとに広がる農村です。洲藻白嶽原始林は、日本系と大陸系の植物が共生する独自の生態系により国の天然記念物に指定されています。



写真：洲藻集落から見た秀麗な白嶽の山容



海の女神・トヨタマヒメ

【日本神話】 海幸山幸

兄・海幸彦（うみさちひこ）は海の漁師、弟・山幸彦（やまさちひこ）は山の猟師です。ある日、弟の要望で、弓矢と釣竿を交換して猟・漁を行います。山幸彦は兄の大事な釣針を無くしてしまいます。兄に責められた山幸彦は、釣針を探す旅に出て、潮の神シオツチの案内で海底の海宮（わたつみのみや）に辿りつき、そこで大海神の娘・豊玉姫（トヨタマヒメ）と結ばれます。大海神の力を借りて釣り針を見つけた山幸彦は地上に戻り、豊玉姫の助力を得て兄を屈服させます。

この後、豊玉姫は出産のため山幸彦のもとを訪れ、「海神の一族である自分は、出産の際に本来の姿に戻ってしまうので、決して覗かないように」と伝えます。山幸彦が産屋を覗くと、巨大なワニ（蛟）あるいは竜の姿に戻った豊玉姫が出産の苦しみでのたうちまわっていました。

約束を破られ、恥じた豊玉姫は子神ウガヤフキアエズ（以下ウガヤと省略）を置いて海宮へ帰り、通路を閉ざしてしまいますが、夫と子を忘れられず、妹の玉依姫（タマヨリヒメ）を乳母として送ります。ウガヤは、叔母・乳母である玉依姫と結ばれ、初代天皇となるカムヤマトイワレビコ（神武天皇）が誕生する場面で、古事記の上巻（神話編）は終わります。

【対馬の伝承】

対馬の伝承では、釣針を探す旅の途中、山幸彦がまずたどり着いたのが美津島町鴨居瀬（かもいせ）で、しばらく隠れ住んだのが同町濃部（のぶ）とされています。濃部には、潜（しのぶ）の里＝濃部という地名伝承があり、集落奥にある天神神社（番号48）には山幸彦が祭られています。

山幸彦と豊玉姫の出逢いの場は豊玉町仁位の和多都美神社（番号63）で、子神であるウガヤが誕生したのは鴨居瀬。豊玉町千尋藻の六御前神社（番号78）にはウガヤと6人の乳母が祭られています。

上記の地域を並べると、鴨居瀬（放浪）→濃部（隠棲）→仁位（出逢い）→鴨居瀬（子の誕生）→千尋藻（子の養育）となり、山幸彦の人生を辿るように神社が点在していることに気づきます。

また、兄の海幸彦は九州南部（鹿児島・宮崎）の隼人（はやと）の祖先とされており、対馬をふくめた九州北部の海洋民が信仰していたのが海神・豊玉姫だとすると、天皇家の祖先である山幸彦の一族と、九州北部の海洋民が手を結び、九州南部の隼人勢力を征服したという歴史物語が見えてきます。

山幸彦と豊玉姫の別離の物語は、力をあわせて九州を平定した2つの部族の間で、なんらかの抗争が発生したことを暗示しているのかもしれませんが、孫にあたるカムヤマトイワレビコは東征を行い、磐余（奈良県）で、初代天皇・神武天皇として即位することになります。

わたつみじんじゃ

和多都美神社

神社番号 63 式内社 (名神大社)
境内社 波良波神社・濱殿御子神社
古式大祭 旧8月1日

周辺の神社

濱殿神社、和多都美御子神社 (64)、
阿恵神社 (65)

アクセス

豊玉町仁位の国道382号線の分岐点から川沿いに2.9km進み、赤い大鳥居の先の海辺に鎮座。



周辺の雰囲気・環境など

対馬市豊玉町仁位 (とよたままちにい) は、対馬の中央に広がる浅茅湾北岸に位置する、同町の中心部です。仁位川沿いに古くから集落が形成され、弥生時代後期には対馬の中心地だったと考えられています。また、室町時代にも宗家の館が置かれ、栄えました。

和多都美神社から1.6キロ南下する (坂道を登る) と鳥帽子岳展望所です。展望所から波穏やかな浅茅湾を一望すれば、古代の海人族が、この地こそが海神に守られた竜宮だと考えたことが納得できます。



御神木は本殿から這い出ている竜の姿

神社のプロフィール

和多都美神社は、浅茅湾北西岸の最奥部に鎮座しています。この地に大海神・豊玉彦の海宮 (わたつみの宮=竜宮) があり、祭神の山幸彦と豊玉姫はここで出逢ったとされています。

秋の大潮の満潮時、海の女神の力が文字通り「最高潮」に達するころ、古式大祭が催行され、中世に起源をもつ、女性が舞う神楽「命婦 (みょうぶ) の舞」が奉納されます。

拝殿前にならぶ5つの鳥居のうち2つは海中にあり、満潮時は海中に、干潮時は干潟の上に基台まで露出し、また秋の大潮の満潮時には拝殿近くまで海面が上昇するなど、海神を祭るにふさわしい雰囲気です。



裏参道にある磐座「豊玉姫の墳墓」

航海神・ツツノオ三神（住吉三神）

【日本神話】 ツツノオ

ツツノオ（筒男）はイザナギの禊により出現した海神です。瀬の深みで清めるとソコツツノオ（底）が、中間ではナカツツノオ（中）が、表面ではウワツツノオ（表）が誕生したとされます。その際、同じく海神であるソコツワタツミ、ナカツワタツミ、ウワツワタツミも生まれています。

（イザナギ・イザナミにより生み出されたオオワタツミとは別神であり、また宗像三神とも異なる系統の海神です）

ツツノオ三神は、神功（じんぐう）皇后に神託を下した神として皇室において重要視され、また航海の守護神として、遣隋使や遣唐使の派遣の際にも篤く崇敬されていました。総本社は住吉（大阪）にあり、住吉三神とも呼ばれています。

【対馬の伝承】

延喜式に、対馬島下県（しもあがた）郡の名神大社・住吉神社の記録がありますが、対馬ではツツノオはほとんど活躍しません。対馬は大陸航路の拠点であり、国家神であるツツノオ三神を無視したとは考えにくいのですが、豊玉姫など異なる系列の海神信仰が濃厚で、その影に隠れてしまったのかもしれませんが。

ツツノオの名前の由来は、航海の目印となる星を意味する古語「ツツ」、対馬南部の豆酸（つつ）などいくつかの説があります。

コラム 住吉神社の分布

延喜式に記録された名神大社・住吉神社は、住吉（大阪府）、下関（山口県）、博多（福岡県）、壱岐、対馬（どちらも長崎県）に鎮座しています。

遣隋使や遣唐使の派遣の際には、まず大阪で安全祈願祭を行い、瀬戸内海を渡ると下関、外海に出て博多、玄海灘を越えて壱岐、そして対馬で最後の祈願祭を行い、はるかな中国へと旅立っていきました。

対馬近海は、自然の猛威や異国との緊張に満ち、神頼みをしなければ越えられない海域であり、住吉三神は朝鮮半島へとつながる大陸航路を守護すべく配置されていたのです。

なお、対馬の住吉神社は古い時代に、鴨居瀬（対馬市美津島町）から鶏知（同町）に移祭したと伝わり、鴨居瀬を元宮、鶏知を新宮と呼びます。移祭の時期は不明で、どちらが延喜式に記載された式内社であるかは、古くから論争があったようです。

すみよしじんじゃ (かもいせ)
住吉神社 (鴨居瀬)

神社番号 45 式内社 (名神大社)

周辺の神社 阿麻氏留神社 (44)

アクセス

美津島町小船越から国道382号線を北上し、分岐を東(右)鴨居瀬方向に進み、住吉大橋手前で右に斜面を下った海辺に鎮座。



周辺の雰囲気・環境など

対馬市美津島町鴨居瀬は、対馬海峡東水道に突き出した半島に位置する集落で、古い時代から大陸航路の重要な港として知られていました。

住吉神社前の海には、美しいサンゴ(ソフトコーラルの仲間)が生育し、名所「紫の瀬戸」として知られています。

神社のプロフィール

拝殿前の鳥居は海に面し、この地が航海の拠点であったことを実感できます。また、近隣の赤島～住吉神社～小船越をめぐる、古代航路の雰囲気がよくわかります。

ツツノオ三神とともに祭られているウガヤフキアエズは豊玉姫の子で、紫の瀬戸の紫(サンゴ)は出産の血だと伝えられています。

すみよしじんじゃ (けち)
住吉神社 (鶏知)

神社番号 36 式内社 (名神大社)

境内社 和多都美神社 (式内社)

アクセス

美津島町鶏知(けち)で国道382号線から県道24号線に入り、400m進んで信号を右折すると鳥居・駐車場が見えてきます。



周辺の雰囲気・環境など

美津島町鶏知(けち。正字は「雞」)は近年、国道382号線沿いに大型スーパーやホームセンターが立ち並び、商業地として発展しています。

古くは神功皇后が、鶏が鳴いたことでこの地に集落があることを知った(鶏知)という由来を伝える集落です。

神社のプロフィール

現在、社殿は内陸にありますが、傍を流れる鶏知川は対馬海峡東水道に面する高浜に注ぎ、北は浅茅湾につながる海上交通の拠点でした。

住吉神社は本来、ツツノオ三神を祭るはずですが、ウガヤフキアエズや豊玉姫などの海神が祭られています。

武神・神功（じんぐう）皇后

【日本神話】 神功皇后

古事記に登場する最強の女性といえば「**神功皇后**」の名が挙げられます。シャーマン（巫女）の能力があり、「西にある金銀財宝が満ちる国を与える」との住吉三神（P17）の神託を受け、朝鮮半島の新羅（しらぎ）征服を、夫である14代**仲哀（ちゅうあい）天皇**に進言しますが、仲哀天皇は神託を疑い、神の怒りにより死を迎えます。

皇后は「**皇后の胎内の男子が今後国を治める**」との神託を受け、軍船を整えて海を渡ると、魚たちが船を持ちあげ、追い風が吹き、船と波が新羅の国土の半ばまで押し寄せました。新羅王は恐れ、戦うことなく服従を誓い、朝鮮を支配することになった、と伝えられています。

神功皇后は北部九州との縁が深く、**鎮懐石**で出産を遅らせ、帰国後に子を産んだ場所を「宇美」（福岡県春日郡宇美町）」と名づけたなど、一帯に皇后に由来する地名伝承が残され、神功皇后と子の**応神天皇**は、宇佐神宮（大分県）を総社とする全国の八幡神社に祭られています。

【対馬の伝承】

神功皇后が対馬に残したものは、八幡宮神社（番号1）をはじめ各地に点在する神蹟・神社、「**鶏知**」「**琴**」「**砥石淵**」「**綱掛崎**」など地名伝承、**カンカンまつり**や**放生会**などの神事があります。その数は非常に多く、常に軍事的緊張にさらされる「国境の島」で、いかに武神・神功皇后が島民の心の支えになっていたかを感じさせます。7世紀に築かれたとされる**古代山城・金田城（かなたのき）**も、**神功皇后の出城**だと信じられていました。

また、神功皇后が豊玉姫の神託を受けた、スサノオを祭ったなど、他の神々を祭った起源説話として語られることも多く、その影響力・存在感の強さを感じさせます。

【神功皇后の航路】

（壱岐勝本）→**厳原町豆酛**：腰掛石、神住居神社（23）、カンカンまつり（神事）→**内院**：奈伊島神社（島・35）、奈伊良神社（28）→**久和**：乙和多都美神社（31）→**久田道**：與良祖神社（6）→**厳原**：与良石・白石、濱殿神社（3）、笠淵、截裳淵、砥石淵→**阿須**→**美津島町根緒**：和多都美神社（37）→**大船越**：綱掛崎→**緒方**：乙宮神社（39）→**鴨居瀬**：八点島、住吉神社（45）、**雷浦**→**豊玉町千尋藻**：伊和津岬幾神社（79）、**入彦神社**→**峰町櫛**：住吉神社（87）→**上対馬町芦見**：能理刀神社（126）→**琴**：胡禄神社（124）、胡禄御子神社（125）、**郷ノ浦**→**西泊**：能理刀神社（114）、**古津麻神社**→**鰐浦**：本宮神社（109）→（新羅）→**峰町佐賀**：和多都美神社（88）→**木坂**：海神神社（86）、**伊豆山**→**美津島町竹敷**：八幡神社（49）→**黒瀬**：大吉戸神社（52）→**鶏知**：和多都美神社（36内）→**厳原町中村**：八幡宮神社（1）、**清水山**→**久田道**：與良祖神社（6）

【神功皇后の航路】



はちまんぐうじんじゃ

八幡宮神社

神社番号 1 式内社（名神大社）
境内社 平神社、宇努刀神社、天神
神社（今宮若宮神社）他

周辺の神社
池神社（2）、濱殿神社（3）

アクセス
厳原町の中心部にあり、厳原港から
国道382号線を北に900m進むと鳥居
が見えてきます。



周辺の雰囲気・環境など

対馬の海の玄関口・厳原港にも近く、
周辺はホテル、商業施設などが立ち並
ぶ繁華街です。社叢（神社の森）には
クスノキなどの巨木が目立ち、新緑の
季節には生命力にあふれる若葉が見事
です。

神社のプロフィール

古くから知られた有力な神社で、歴
代藩主の崇敬も篤く、宝物庫には太
刀・高蒔絵などが奉納されています。

神功皇后が三韓征伐の帰途、自ら
神々を祭り、外国の侵略から守り給え
と祈ったと伝わります。もともとは海
神を祭る名神大社・和多都美神社だっ
たようですが、国防意識の高まりとと
もに、武神である神功皇后が祭神とな
ったと考えられています。



清水山城・三の丸からの眺望

コラム 清水山の謎

八幡宮神社は、厳原港の北北西
にそびえる清水山のふもとに鎮座
しています。清水山は、全体が照
葉樹（冬でも落葉しないシイ・カ
シなどの常緑樹の仲間）に覆われ、
山頂部の岩盤が露出しているなど、
白嶽や龍良山に共通する特徴が
あり、対馬の信仰の原型を感じるこ
とができます。

戦国末期の文禄慶長の役に際し、
豊臣秀吉の命令で清水山城が築か
れ、当時の貴重な山城遺構として、
国の史跡に指定されています。石
垣が尾根に沿って500mにわたっ
て残されており、市街地にもっと
も近い三の丸からでも、城下町の
町並みや厳原港、対馬海峡を一望
できます。

山頂・三の丸からは隣の島・吉
岐が見えることもあり、古い時代
から海上交通上および軍事上、重
要な山であったことがうかがえま
す。

対馬の中央に広がる浅茅湾南岸
に、古代山城・金田城（かなたの
き）が築かれた「城山（じょうや
ま）」がありますが、そちらが対
朝鮮半島の山城だとすれば、清水
山は九州からやってくる船を監視
するための山城だったのかも知れ
ません。

海神 イソラ

【日本神話】

イソラ（磯良）は、志賀島（しかのしま。福岡県）を拠点とした古代の海洋民族・安曇（あずみ）氏の祖神です。記紀には登場しませんが、中世の「太平記」では、海底に棲む精霊として描かれ、神功皇后の三韓出征の際に招かれたものの、海藻や貝が顔にはりついて醜いことを恥じて現れず、住吉の神が舞を奏したところそれに応じて参上し、神功皇后の水先案内を務めたとされています。

【対馬の伝承・異伝】

イソラは豊玉姫の子とされ、ウガヤフキアエズと同一視されています。和多都美神社（番号63）の社殿前の干潟には、亀のウロコのような亀裂があるイソラエベス（磯良夷）と呼ばれる霊石が祭られています。

また、神功皇后の出征に関連し、厳原町阿須（あず）で皇后を出迎えたとか、上対馬町琴（きん）・琴崎沖で沈んだ碇を潜水して取りもどした、損傷した船の傷口に大きなアワビを貼りつけて応急処置した、上対馬町五根緒（ごねお）に上陸した、などの伝承があります。

琴崎は海神にまつわる伝承が色濃く、海底には「竜宮の門」があり、亀に乗ったイソラがその門を出入りするとか、琴崎大明神（＝胡祿神社、番号124）の御神体は海神の祭日である3月3日に、巫女が磯ですくいあげた金色の小蛇だとされています。



ころくじんじゃ 胡祿神社

神社番号 124 式内社（名神大社）

周辺の神社 胡祿御子神社（125）

アクセス

上対馬町琴（きん）集落に鎮座する胡祿御子神社右横の山道を800m歩きます。途中の分岐点を直線すれば琴崎灯台、左折すれば琴崎方向です。

周辺の雰囲気・環境など・神社のプロフィール

胡祿神社の鳥居は海に向いて立ち並び、眼前には対馬海峡の大海原が広がり、対馬の原始的な海神信仰の雰囲気は今に伝えています。神島である黒島様とのケンカの際、竹を投げつけたので竹が無く、松が残ったという伝説があります。

亀卜（きぼく）の伝承 イカツオミ

【日本神話】 神功皇后

仲哀天皇の死に際し、神功皇后は自ら祭主となり、武内宿禰（たけのうちすくね）に琴を弾かせ、中臣烏賊津使主（なかとみのいかつのおみ）を、神意を解釈する審神者（さにわ）としました。（日本書紀）

【対馬の伝承・異伝】

神功皇后の外征を支えたのは、個性的で有能な家臣たちでした。特にイカツオミ（雷大臣）は、皇后の凱旋後に対馬に留まり、古代の占いの技術である亀卜を伝えたとされます。イカツオミはまず豆酏（つつ）に住み、次に阿連（あれ）に移り、加志（かし）で生涯を終え、加志の太祝詞神社（番号56）横に墳墓（中世の宝篋印塔）があります。

豆酏には亀卜が残り、加志の太祝詞神社は名神大社であり、阿連は「対馬の神道」の著者・鈴木棠三から「対馬神道のエルサレム」と称されるなど、イカツオミの痕跡が色濃く残されています。名称に「雷（霹靂）」「能理刀（のりと）」がつく神社では亀卜が行われていたケースが多く、全島に分布しています。

コラム 占いの変遷

古代において、作物の豊凶や天変地異、病気の蔓延等は、統治者の重要な関心事でした。場合によっては、統治者がその責任を負い、処刑されることもあったのです。

日本では、古くから鹿の肩骨を焼いて占う太占（ふとまに）が行われていましたが、対馬には5世紀頃、亀の甲羅を用いる亀卜が大陸から伝来していたようです。

律令時代（7世紀後半～）には、国家の吉凶を占う手法として亀卜が採用され、伊豆5人・沓岐5人・対馬10人の三国卜部（さんごくうらべ）が占いの職能集団として朝廷に仕え、重視されました。政祭一致の時代、対馬は占いのみならず、政治的な影響力も保持していたのです。

平安時代になると安倍晴明などの陰陽師（おんみょうじ）が活躍するようになり、さらに鎌倉時代になると武士が台頭し、対馬の卜部は力を失いますが、亀卜は対馬藩の公式行事として幕末まで存続しました。

ちなみに、亀卜に使うウミガメの甲羅は、阿連の大野崎沖で獲れるものが最上とされ、逆に佐護・木坂・豆酏沖のものは使わないなど、厳格なルールがあったようです。豆酏の亀卜は形を変えて現在も行われ、国の無形民俗文化財に指定されています。

いかづちじんじゃ

雷神社

神社番号 27 式内社
亀卜神事 旧1月3日

周辺の神社 多久頭魂神社 (21) ほか

アクセス 厳原町豆酩(つつ)の西を流れる乱川横の小道を北上すると、板状の石でできた橋と小さな社殿があります。



周辺の雰囲気・環境など

豆酩は亀卜や赤米神事など独自の伝承・習俗に彩られた集落です。南端の豆酩崎は東シナ海に突き出した岬で、遊歩道が整備され、対馬海峡の広大なパノラマが眼前に広がります。

神社のプロフィール

亀の甲羅を用いる占いの起源は、約3000年前に滅亡した中国最古の王朝・殷(いん)とされ、現在でも旧暦の1月3日、雷神社で神事が行われています。神事の奏上の言葉から、俗にサンゾーローまつりとも呼ばれます。

ふとのりとじんじゃ

太祝詞神社

神社番号 56 式内社(名神大社)

周辺の神社 敷島神社 (55)

アクセス 県道24号線から美津島町加志(かし)集落に入り、川沿いの道を森の奥にむかっていると約2km進むと、右手に鳥居・社殿が見えてきます。



周辺の雰囲気・環境など

美津島町加志は、対馬の中央に広がる浅茅湾(あそうわん)の南西部に位置する農村です。

霊峰・白嶽の西麓にあり、集落からその秀麗な山容を拝むことができます。

加志浜では初春、海藻のアオサが手摘みで収穫され、対馬の風物詩のひとつとなっています。

神社のプロフィール

イカツオミおよびその祖とされる太祝詞神(アメノコヤネ)を祭る、加志集落の奥に鎮座する名神大社です。イカツオミは豆酩・阿連・加志に足跡を残しており、阿連・加志の宮司はその子孫とされる橘氏で、対馬卜部の本流とされています。

鉾山の神 モロクロガミ

【日本神話】

鉾山の神は**金山彦・金山姫**ですが、イザナギの嘔吐物から誕生したと伝わるほか、ほとんど活躍は描かれません。

【対馬の伝承・異伝】

対馬は**日本で最初に銀が発掘**された地（日本書紀、674年）で、鉾脈の分布と関連しているのか、主に厳原町の西部に鉾山の神を祭る神社があり、**檜根**には古代鉾山の坑道が残っています。

モロクロガミ（諸黒神）は対馬固有の神で、坑道の漆黒の闇を意味する、あるいは矢立山の別称・室黒岳に由来するとされています。「**異国からやってきた神**」という伝承もあり、朝鮮半島系の鉾山の技術者が安全祈願のために祭ったか、あるいは坑道の闇で誕生した神なのかもしれません。

奈良時代から平安時代にかけて対馬で産出する銀は大宰府に納められましたが、地下を掘り進んで鉾石を採掘する作業は、落盤や出水、酸欠など常に危険と隣りあわせて、落盤事故なども記録されています。江戸時代には対馬藩により銀山の開発が行われ、朝鮮貿易の代価として藩の財政を支えました。

コラム 阿連（あれ）の鉾山跡

日本最古の対馬銀山は厳原町檜根にあったとされますが、同町阿連の山中にも古い時代の鉾山跡があります。沢の底を掘り下げ、排水のため石を積み、手掘りで岩盤をくり抜いています。対馬の歴史の1ページとして、調査研究が待たれます。



ぎんざんじょうじんじゃ
銀山上神社

神社番号 32 式内社

アクセス 厳原町久根田舎（くねいなか）の久根川沿いに県道24号線が走り、御所橋を渡ると鳥居が見えてきます。

周辺の雰囲気・環境など

厳原町久根田舎は、対馬最高峰・矢立山（649m）を源とし、西海岸の久根浜に流れる久根川中流域に位置する集落です。古名は「大調」（おおつき）で、調（税金の代わりに納める特産品）として朝廷に銀を献上していたことにちなみます。

山に囲まれた静かな農村で、石屋根など伝統的建築物が残るほか、安徳天皇にまつわる伝説があり、山中に宮内庁の御陵墓参考地（P31）があります。



神社のプロフィール

社殿は立派で、苔むした参道が美しく、銀山神社（番号14）とともに式内社「銀山上神社」「銀山神社」の論社とされています。境内に、式内社論社の都々地神社（矢立山遥拝所）があります。



ぎんざんじんじゃ
銀山神社

神社番号 14 式内社

周辺の神社 小茂田濱神社（12）

アクセス 厳原町榎根地区の佐須川と榎根集落の間、ゲートボール場の横に鎮座しています。

神社のプロフィール

式内社「銀山上神社」「銀山神社」の論社です。鎌倉時代の元寇において、元軍の目的は銀鉱山だったとも言われており、佐須地区は大きな被害を受けます。境内に宗家初代・宗助国（P32）の太刀塚があります。

周辺の雰囲気・環境など

厳原町榎根は、佐須川流域に位置する集落で、古代の坑道が残されています。近くには国指定史跡の矢立山古墳群（7世紀後半）があり、鉱山との関係が指摘されています。集落奥の法清寺には、千手観音像や木像仏が安置され、この地が古い時代から栄えていたことを感じさせます。

穀物の神 大歳神、ウカノミタマ

【日本神話】

スサノオの子である**大歳神**、**ウカノミタマ**はともに穀物神とされ、前者はお正月に来訪する神として、後者は**お稲荷さん**として全国に祭られています。また、同じく食物（穀物）神であるオオゲツヒメ、ウケモチは、スサノオやツクヨミに一度殺され、その死体から穀物が生成した、とされています。これは、発芽→開花→結実→枯死（→発芽）という植物の生成サイクルをそのまま表わしているようです。

【対馬の伝承・異伝】

農耕地が極端に少ない対馬（面積の89%が山地）では、全国的にポピュラーなお稲荷さん（穀物神）が祭られることは少なく（お稲荷さんの神獣である狐が生息しないことも影響しているのかもしれませんが）、ほとんどの集落で漁業・海上交通の神である恵比須・金比羅が祭られています。

例外的に、上県町伊奈に**白い鶴が飛来して稲穂を落とし**、それを志多留の榎田に植えたのが**対馬での米作りの始まり**である、という稲作伝来の物語が残されています。

両集落は大陸に近い北西部の海岸沿いに位置し、貝塚や古墳があるなど古くから人が住んでいたことがわかっており、対馬における稲作伝来の最初の地だったのかもしれませんが。ちなみに、「伊奈」は「稲」が転訛した地名と言われています。



いなくいじんじゃ

伊奈久比神社

神社番号 104 式内社

周辺の神社 志多留能理刀神社（105）

アクセス

上県町西部、越高～伊奈間の道路沿いに鳥居があり、階段を登ると社殿があります。

周辺の雰囲気・環境など・神社のプロフィール

対馬北西部の伊奈は、中世から江戸時代にかけて、周辺の16村で構成される伊奈郷の中心地でした。近隣の越高・志多留には縄文時代にさかのぼる遺跡や貝塚があり、朝鮮半島にも近く、対馬最初の稲作伝来地としてもおかしくはありません。白鳥の古名は「鶺鴒（くぐい）」であり、稲鶺鴒（いねくぐい）＝伊奈久比（神社）という説もあり、その場合、稲を運んだのは鶺鴒ではなく白鳥ということになります。

太陽の女神 オヒデリ

オヒデリ

神社庁登録なし、祭神 オヒデリ
所在地 厳原町阿連の山中

周辺の神社 雷命神社 (18)

アクセス 厳原町阿連集落奥に雷命神社があり、そこから阿連川を遡った山中に祠があります。

神社のプロフィール

集落内に雷命神社(番号18)がありますが、祭神の雷命は、旧9月29日(以下、すべて旧暦)に出雲に旅立って不在(神無月)となるため、川上に鎮座するオヒデリを里に迎えます。

11月1日に雷命が戻り、1週間オヒデリとともに暮らし、11月8日に大祭、11月9日に住民総出でオヒデリを川上にお送りする神事(本山送り)が行われます。

この時オヒデリは懐妊しているとされ、雷神・水神・男神である雷命と、太陽神・女神であるオヒデリが和合し、里に豊穡がもたらされる、という古い民俗学の世界が今に伝わります。



周辺の雰囲気・環境など

厳原町阿連は対馬の南西部に位置し、西には対馬海峡東水道(朝鮮海峡)が広がり、三方を山に囲まれた半農半漁の集落です。戦後、道路整備が進むまで、ながらく陸の孤島でした。

山中に古い時代の鉱山があり、対馬に亀卜(きぼく。古代の古い技術)を伝えたとされイカツオミ(雷大臣)が住み、遣唐使のひとりとして唐で修行をした最澄が帰途に漂着するなど、古い歴史と伝承に彩られています。



らいめいじんじゃ

雷命神社

神社番号 18 式内社

周辺の神社 オヒデリ

アクセス 厳原町阿連の集落奥に鎮座。

神社のプロフィール

祭神は古い神イカツオミですが、竜神・水神・雷神などの自然神の性格をもっています。近年、竜巻によりご神木が折れた事例があり、竜巻=竜神が発生する場所を選んで祭られたのかもかもしれません。

天道信仰と天道法師 タクスダマ

【日本神話】 なし（対馬固有の信仰）

【対馬の伝承・異伝】

7世紀後半、内院（ないいん。厳原町）に高貴な女性が**虚船（うつろぶね）**に乗って漂着し、太陽に感精して子を産みました。「太陽の子」は**天道法師**と呼ばれ、嵐をまとして空を飛び、天皇の病気を治すなどの奇跡をおこします。

豆酸（つつ）の北東に広がる**龍良山（たてらさん）**中の**八丁角（はっちようかく）**。北と南の2ヶ所にある石積み）は、天道法師とその母の墓所とされ、多久頭魂神社境内の不入坪（イラヌツポ）とあわせて「**オソロシドコロ**」と呼ばれ、龍良山という聖域の結界を構成しています。

対馬固有とされる**天道信仰**は、天道法師という超人と霊山・龍良山を中心に、太陽信仰・母子神信仰・修験道・古神道などの要素が複雑に絡み合い、平安時代ころに成立したと考えられています。

多久頭魂（たくずだま）神社（番号21）の現在の祭神は天神・天孫系ですが、古くは龍良山を御神体として社殿はなく、対馬固有の**タクスダマ（多久頭魂）**を祭り、神仏習合時代にはタクスダマ＝天道法師とされていました。天道信仰の南の中心部・豆酸には**高御魂（たかみむすび）神社（番号22）**が、北の中心部・上県町佐護には**神御魂（かみむすび）神社（番号95）**があり、多久頭魂神は、両社にまつられたタカミムスビとカミムスビの子神とされています。（P7）

豆酸は対馬の南端に位置し、陸路による他地域との交流が少ない反面、航路の拠点として国内外の文化が流入する地域であり、亀トや天道信仰、赤米神事など独自の文化・歴史が形成されてきましたが、近年は過疎・高齢化のため、伝承の存続が危ぶまれています。

なお、龍良山はその強烈なタブーにより、標高120mの低域から山頂558mまで良好な照葉樹原始林（スダジイ・イスノキ・アカガシなど）が残り、国の天然記念物に指定されています。龍良山に入ると、「森の神」が生きていた縄文時代の森の雰囲気を感じることができます。



龍良山原始林（左）と聖地・八丁角（右）

たくずだまじんじゃ

多久頭魂神社

神社番号 21 式内社（多久頭神社）
境内社 高御魂神社(22)、神住居神社
(23)、師殿神社(24)ほか

周辺の神社 雷神社(27)

アクセス 厳原町豆殿集落の北東部の
外れの森の中に鎮座してい
ます。



周辺の雰囲気・環境など（P8「高御魂神社」参照）

神社のプロフィール

神功皇后が三韓征伐に際して神々を祭ったと伝えられ、出兵の様子を紅白の小船で再現する「カンカン祭り」が伝承されています。

豆殿の人々が神聖視する龍良山のふもと（北と南）に、聖地・八丁角（通称オソロシドコロ）があります。禁足地として里人も立ち寄らず、社殿もありませんでしたが、神仏分離に際して豆殿寺の観音堂を遥拝所（信仰対象を遠くから拝むための建物）としたものが、現在の社殿です。

あめのかみたくずだまじんじゃ

天神多久頭魂神社

神社番号 94 式内社
亀卜神事 旧1月3日

周辺の神社 神御魂神社(95)

アクセス 上県町佐護（さご）を流れる
佐護川河口部に鎮座してい
ます。



周辺の雰囲気・環境など

いくつも集落で形成される上県町佐護地区のうち、もっとも海岸部に面しているのが佐護湊（みなと）です。

対馬では珍しい水田地帯であり、神社の多さから、古い時代から人が住み、栄えてきたことを計り知ることができます。環境省の対馬野生生物保護センターがあり、自然豊かな地域です。

神社のプロフィール

天道山を御神体とし、社殿がなく、石積みで聖地を結界する古い信仰形態を残しています。対馬の古い神社の大半は、神籬磐境式といわれるこうした方式だったと考えられており、その原型にふれることができます。（P13 コラム「山岳信仰と磐座」参照）

人物神 宗一族・小西マリア

【日本神話】

神とは人ならぬものですが、人が神格化され、神となる場合もあります。太宰府天満宮の菅原道真、日光東照宮の徳川家康、明治神宮の明治天皇などがその代表です。

【対馬の伝承・異伝】

対馬においては、鎌倉時代から幕末まで対馬を統治した宗氏一族（宗家）を祭った神社が多く見られます。特に、元寇において元・高麗軍と激しく交戦し、戦場に散った初代島主・宗助国（そうすけくに）は篤く崇敬されています。

小西マリアは、宗家第19代（のちの対馬藩初代藩主）宗義智（よしとし）の妻で、戦国武将・小西行長の娘です。行長は関ヶ原の合戦で徳川家康に敗れ、キリシタンであったため切腹を拒否し、斬首されました。義智とマリアは離縁という結末を迎えることになります。



いまみやわかみやじんじや 今宮若宮神社

祭神 小西マリア

所在地 厳原町中村645番地1
(八幡宮神社(1)境内天神神社に合祀)

神社のプロフィール

キリシタンである小西マリアとその子を祭る珍しい神社です。菅原道真を祭る天神神社に合祀され、奇しくも天神・マリア・子というキリスト教の三位一体（さんみいったい）を構成しています。

コラム 宗家と安徳天皇

厳原町久根田舎（くねいなか）には、源平の合戦で壇ノ浦に沈んだはずの幼帝・安徳天皇を祭る陵墓があり、宮内庁の御陵墓参考地に指定されています。

対馬の伝説では、安徳帝は、壇ノ浦を生き延び、島津氏の娘との間に宗家初代となる宗重尚（しげひさ）をもうけ、70歳のときに筑前から対馬に渡り、久根に御所を営んだ、とされています。

宗重尚が在地勢力の阿比留（あびる）氏を討伐して対馬の支配権を確立したという物語が、島内では長く信じられてきましたが、近年は重尚の実在性そのものが疑問視されています。宗家の血筋を安徳帝に求める願望が、重尚という人物を生み出したのかもしれない。

ちなみに、重尚は、厳原町内山の木武古婆（きむこば）神社（番号19）に祭られており、実在しないとすればいったい誰が祭られているのか、謎は深まります。

こもだはまじんじゃ

小茂田濱神社

神社番号 12

大祭 鳴弦の儀（11月第2日曜日）

アクセス 厳原町小茂田地区の佐須川河口部に、海に面して鎮座しています。



周辺の雰囲気・環境など

対馬南部の西海岸に位置する小茂田（佐須地区）は、対馬海峡西水道に面し、佐須川の河口部に農地が広がる集落です。

現在ののどかな風景からは想像できませんが、小茂田は鎌倉時代の元寇（文永の役）の激戦地でした。当時はもう少し内陸（現在の金田小学校付近）が海岸線だったと考えられています。

佐須坂トンネルの開通（2016年）により、島の東西を15分ほどで移動できるようになりました。特産品は対馬そば・若田硯など。

神社のプロフィール

1274年、総勢3万とも4万ともいわれる元・高麗軍のうち、1000人あまりが小茂田浜（当時は佐須浦という深い入江）に上陸し、68歳であった対馬守護代・宗 助国（宗家初代）以下80余騎は、勇猛果敢にこれを迎えました。数時間の激戦の末、全滅しました。

村人が古戦場周辺に助国公の首塚、胴塚、太刀塚（番号14内）をまつり、のちに宗家4代経茂公が神社を建立しました。

宗家をまつる神社

木武古婆神社（厳原町内山・番号19）

宗 重尚（伝説上の宗家初代）

小茂田濱神社（厳原町小茂田・番号12）

宗 助国（宗家初代。元寇にて戦死）

豊崎神社（上対馬町比田勝・番号115）

宗 盛維（宗家初代・宗 助国の兄弟（伝承））

乙宮神社（／糠嶽神社）（豊玉町卯麦・番号66）

宗 貞茂（宗家7代。応永の外寇にて戦死とされるが、実際は前年に死去）

師殿神社（厳原町豆酸・番号24）

宗 盛世（宗家8代・宗 貞盛の弟。筑前春日山にて大内氏と交戦、戦死）

舌崎神社（／壬神社）（上対馬町泉・番号113）

宗 盛国、宗 盛世（宗家8代・宗 貞盛の弟。筑前春日山にて大内氏と交戦、戦死）

高崎神社（上対馬町五根緒・番号130）

宗 盛弘（宗家12代・宗 義盛の伯父。三浦の乱にて朝鮮で戦死）

白磯神社（厳原町中村・番号1内に合祀）

宗 義純（宗家19代・初代藩主・宗義智の兄。自刃。厳原港近くに祭られていたが、厳原八幡宮内天神神社に合祀）

対馬 式内社29座（大6座・小23座）

延喜式（927年）に記載された名社群も、神仏習合の時代を経て祭神や社号が変わったり失われたところがあります。以下、同定にほぼ異論がない神社は1候補地のみ、異論があるものは複数の候補地を記載しています。

上県郡 16座（大2座・小14座）

神社名	候補地（長崎県対馬市を省く）
和多都美神社（名神大）	峰町木坂／豊玉町仁位
和多都美御子神社（名神大）	峰町木坂／豊玉町仁位／上対馬町琴
島大国魂神社	上県町佐須奈／上対馬町豊／上県町佐護（御嶽）
能理刀神社	上対馬町西泊／上対馬町浜久須
天諸羽命神社	上県町佐護深山／峰町吉田／上県町佐護恵古
天神多久頭多麻命神社	上県町佐護湊／上県町湊／峰町三根
宇努刀神社	厳原（八幡宮神社内）
小枚宿祢命神社	峰町三根／峰町櫛
那須加美乃金子神社	上対馬町小鹿
伊奈久比神社	上県町伊奈
行相神社	豊玉町田／上県町伊奈／不明
胡祿神社	上対馬町琴／峰町木坂
胡祿御子神社	上対馬町芦見／上対馬町琴／峰町木坂
島大国魂神御子神社	上県町仁田／上県町佐須奈／豊玉町曾
大島神社	上対馬町豊／豊玉町仁位／不明
波良波神社	豊玉町小綱（綱島）／豊玉町仁位

下県郡 13座（大4座・小9座）

神社名	候補地（長崎県対馬市を省く）
高御魂神社（名神大）	厳原町豆酸
和多都美神社（名神大）	厳原（八幡宮神社）／厳原町久和
太祝詞神社（名神大）	美津島町加志
住吉神社（名神大）	美津島町鶏知
銀山上神社	厳原町久根／厳原町（佐須地区）／厳原町檜根／厳原町檜根（銀之本）
雷命神社	厳原町阿連／厳原町豆酸
多久頭神社	厳原町豆酸
阿麻氏留神社	美津島町小船越
和多都美神社	美津島町鶏知／豊玉町仁位／美津島町濃部
平神社	厳原（八幡宮神社内）
敷島神社	美津島町加志
都都智神社	厳原町久田／厳原町久根／厳原町豆酸
銀山神社	厳原町檜根／厳原町（佐須地区）

対馬神社(式内社)地図(Google マップ) <https://goo.gl/Adf1ta>

神話をめぐる旅 ～新たな扉～

2017年3月、編集作業も終盤をむかえた神社ガイドブックの原稿を見たスタッフKさんが、ぼつりとつぶやきました。

「私の家も代々、地域の神社の総代をやってるんですよ。詳しいことはわからないけど」

話を聞いてみると、その神社は美津島町濃部（のぶ）の天神神社（番号48）で、祭神は山幸彦。濃部には、山幸彦が隠れ住んだとされる彦守（ひこもり）という地名があり、船でしか行けない綿打河（わたうちごう）の祠では、毎年夏、集落の人々が神事を行っているとのことでした。

Kさんのお父さんの船で現地に連れていってもらおうと、たしかに鳥居と祠があり、近くの鼓岳（つづみだけ。別名わたつみ山）には、「神様が水を汲みに降りてくる」という伝承があることがわかりました。

調べてみると、綿打河には遺跡（箱式石棺）があり、古くから人が生活していたのは間違いありません。現在の濃部は30戸ほどの小さな集落ですが、15世紀には海上交通の拠点として200戸の大きな集落を形成していました。

高い山がなく、真水が確保しにくい浅茅湾内で、綿打河が文字通り「ワタ（＝古語で海）の内の川」だとしたら、貴重な水源として神聖視されても不思議ではありません。この豊かな神話的環境と比べると、山幸彦の物語（P15「対馬の伝承」）は、「できすぎている」ような違和感を覚えました。

神社庁に登録されていない濃部の神社を訪問したことで、本ガイドブックを作成しながら感じていた疑問——江戸時代以降（特に明治期）、日本各地の伝承が古事記・日本書紀（記紀神話）によって「上書き」され、その多様性を失ってしまったのではないか——をより強く感じることになりました。

明治時代、公教育の普及と神社の統廃合・神仏分離、御神体であった原始林の伐採が推し進められ、地域の信仰は迷信として排除されていきましたが、さいわい対馬は、島の面積の89%を森林が占め、浅茅湾の地形は複雑で無人島も多く、要塞地帯として開発が抑制されるなど、「上書き」されにくい環境が維持されてきました。

現地を訪れ、想像力と直感を駆使して「日本神話」のベールを透かしてみれば、その下には海のように深く豊かな「対馬神話」の世界が広がっているのかもしれない。

対馬の神社をめぐる旅の果てにたどり着いたのは、神話の源流への新たな扉だったのです。



国境の島 対馬へお出かけの前に
一般社団法人 対馬観光物産協会

〒817-0021

長崎県対馬市厳原町今屋敷672-1

観光情報館ふれあい処つしま

TEL 0920-52-1566/FAX 0920-52-1585

<http://www.tsushima-net.org/>

胡祿神社（上対馬町琴）